

平成20年12月の解説（府県天気予報）

【12月の天候状況】

上旬から下旬の前半は低気圧と高気圧が交互に日本付近を通過したため、天気は数日の周期で変わりました。このため冬型の気圧配置は一時的となり、低気圧や気圧の谷に向かって南から暖かい風が吹いたので北日本を中心に高温となりました。下旬後半は強い冬型の気圧配置になり、北日本から西日本にかけての日本海側や奄美と沖縄地方では曇りや雪または雨で、太平洋側では晴れの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、東日本の日本海側や奄美と沖縄地方では平年よりかなり少なくなりました。降水量は北日本と東日本の太平洋側、西日本の日本海側で平年より多くなりましたが、奄美と沖縄地方ではかなり少なくなりました。気温は北日本と東日本で平年よりかなり高くなりました。

【12月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が85%、明後日予報が83%で、明日予報は例年^(注)より2ポイント高く、明後日予報は例年より3ポイント高くなりました。地域毎の適中率では、明日予報は東海、四国、九州北部地方で例年より2ポイントから8ポイント低くなりましたがその他は高くなり、沖縄地方では12ポイント高くなりました。明後日予報も全国的に例年並みか例年より高くなり、沖縄地方で例年より15ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は全国的にほぼ例年並みになり、全国平均では例年と同じ1.5でした。また、最低気温の予報誤差も例年並みとなり、全国平均では例年と同じ1.6でした。

^(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12月の天気予報から】

12月22日、北海道の東海上の低気圧からのびる寒冷前線が本州を南下し、昼過ぎから夜にかけて関東地方の広い範囲に降水があり、東京地方では夕方から夜遅くにかけてほぼ全域で1ミリ以上の降水を観測しました。

前日21日17時発表の東京地方の明日予報は「南西 後 北の風 曇り」で、降水確率は06時から12時、また12時から18時が20%、18時から24時は30%と発表しました。これは数値予報でも午前中の前線通過時に茨城県や千葉県などの関東地方東部沿岸部中心に降水を予想していたことと、前線通過後には関東地方は山越えの風が吹くため沿岸部を除いて雨が降りにくいと予想したからです。

当日22日05時発表の東京地方の予報は「曇り夜のはじめ頃雨」で降水を予想した表現に変わ

りました。これは数値予報が寒冷前線通過後に前線北側の寒気による降水を強めた予想に変わったためです。

実際の当日の天気変化は、朝から昼前にかけて寒冷前線が関東地方を通過し、予報どおり関東地方東部中心に降水域が広がりました。図1のように、昼過ぎになって寒冷前線は関東の沿岸から離れていきましたが、関東地方南部では気圧の谷が残り降水の広がりやすい湿った北東風が予想より強まったため、図2のように、夕方から夜遅くにかけて広い範囲で降水がありました。東京地方でも雨は夕方からの夜遅くまで続き、ほぼ全域で雨が降りました。

現在の予報技術では、寒冷前線通過に伴う降水はある程度早い段階で予想できても、湿った北東風の流入、それによる降水の範囲や時間的な経過などを常に的確に予想することはなかなか困難です。引き続きこうした局地的な降水にかかる予報精度の向上を図り、適切な天気予報の発表ができるように取り組んでまいります。

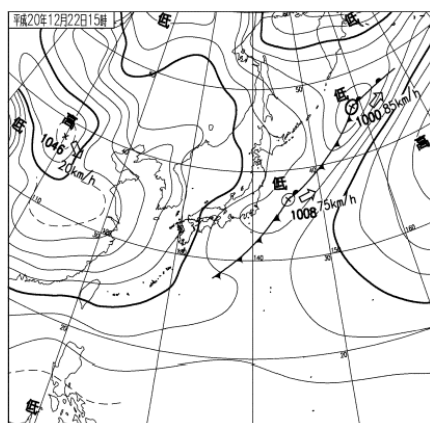


図1 22日15時の天気図

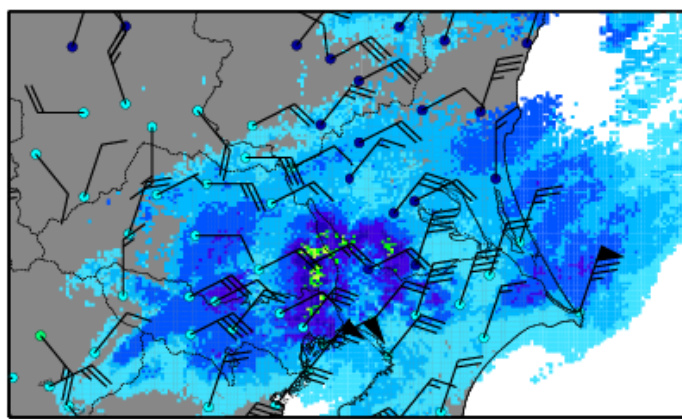


図2 22日18時の降水の状況

【2月の天気予報の利用にあたって】

西高東低の気圧配置となって北風が続く冬も終わりに近づくと、春にかけて低気圧が発達しながら日本海を通過することが多くなります。低気圧が近づいてくると、この低気圧に向かって強い南よりの風が吹きます。立春から春分の間に初めて吹く強い南よりの風を「春一番」と呼んでいます。

「春一番」は冬の終わりと春の訪れのきざしですが、このような強い南風が吹くと、急激に気温が上がり乾燥することがあります。このような気象状態で火が発生すると強風にあおられて燃え広がりやすくなります。また多雪地帯では高温のため積雪がゆるんで雪崩が発生しやすくなるので、ともに注意が必要です。